

Project

高濱史子

Fumiko TAKAHAMA

見るちから、伝えるちから

To have an Eye, to have a Mouth

写真家イワン・バーン×高濱史子

Conversation with Iwan Baan

109

120

見るちから、伝えるちから

高濱 史子

学生の頃、友達に「目」の人だね、と言われたことがある。いや、私は鼻も利くし、音楽をやっていたから耳だって、と反論したくなる気持ちは今でもあるが、最近になってそうなのかもしれないと納得するようになった。というのも、私の関心はいつも自然と「見え」に向いていて、それに対するこだわりは人一倍強い。一方海外で働いていると、見るちからがあっても伝えるちからが無いことを日々痛感し、ただただもどかしい。ここでは、去年事務所とは別に個人でやったインスタレーションを紹介することで私の思考の断片が示せたらと思う。どうやってうまく伝えられるかを考えた末、エッセイの構成を大きく、プロジェクトの記述、対談による考察、の二つに分けた。また言葉だけでなく、図や写真を数多く載せている。ぱっと見ではわかりにくい写真の中の空間をじっくり凝視してみてください。実際の空間体験を通してしか伝わりにくい事は承知の上で、少しでも多くの人に何らかの気づきの瞬間が訪れることを願うばかりである。

To have an Eye, to have a Mouth

Fumiko Takahama

When I was student, a friend of mine told me that I'm an "Eye" person. I still believe that I have a very sensitive nose and good ears because I enjoy cakes and I used to play some music, but somehow I must also agree with him. Lately I have realized that I naturally pay great attention to how things 'look', and my obsession with the visual sometimes seems to be stronger than for others. On the other hand, working abroad I often feel the need to constantly improve my communication skills. Without a "mouth", I can't express what my "eye" tells me. So here I try to express some of my current thoughts and interests by showing a small installation in Basel, my latest project alongside my work at Herzog & de Meuron. This essay consists of two parts. The first is a description of the work and the second part records a dialogue about the relationship between the work, photography and wider problems of representation. The essay also intentionally contains many graphics and photos. Please take an extra moment to look carefully at these images. It is hard to get the whole experience of the installation without being in the space, but I hope that this essay will make it is possible for people to imagine what happened.



Extending Symmetries／拡張するシンメトリー

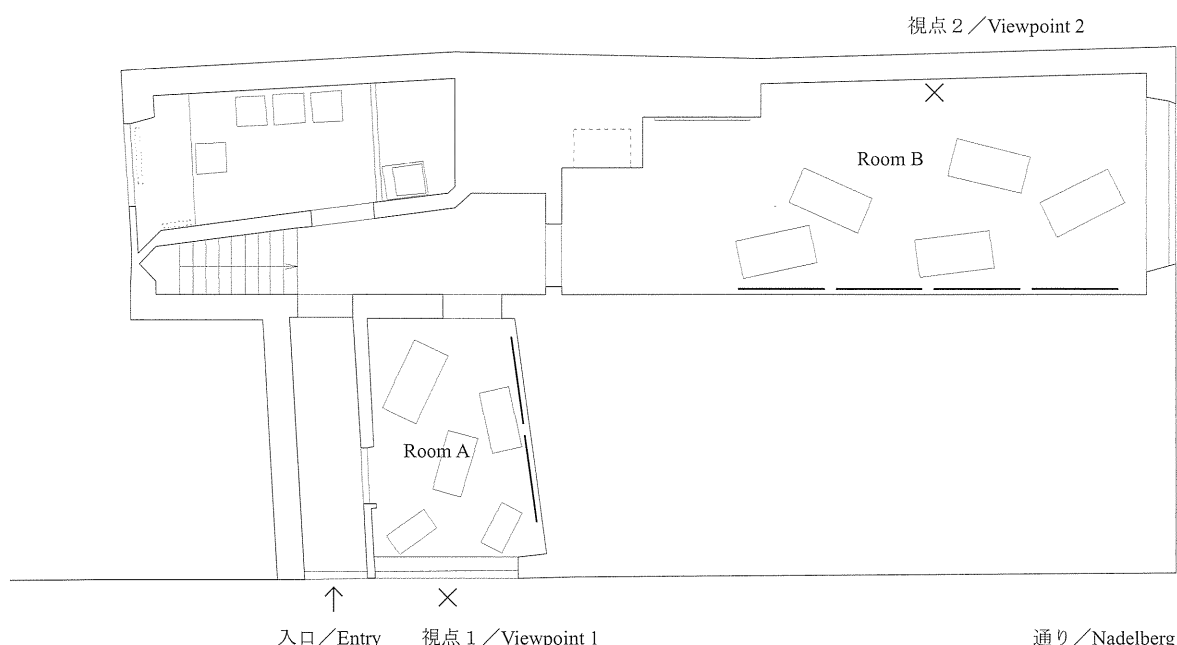
The looking-glass sheep asks, «What is it you want to buy?»／鏡の国のひつじは言いました、『なにを買いたいんだね?』

構成

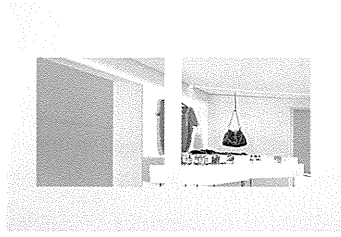
「拡張するシンメトリー」は二つの部屋によって構成されている。それぞれの部屋には「鏡」の効果を持つ一連の写真と、その鏡の効果によって生み出されるシンメトリーを完成させるために新しくデザインされたディスプレイテーブルとハンガーフックが配置されている。写真は鏡のように反転した世界を映し、まるで自分のいる空間が壁を通り抜けてつながっていくように見せているが、正確にシンメトリーが成立するのはそれぞれの部屋につき一つの視点に限られている。一つ目の部屋（Room A）では、路上から大きなディスプレイウィンドウ越しに部屋をのぞく位置に、奥にある二つ目の部屋（Room B）では、写真がかかっている壁の中心に正対する位置に、その視点がとられている。

How to approach the installation....

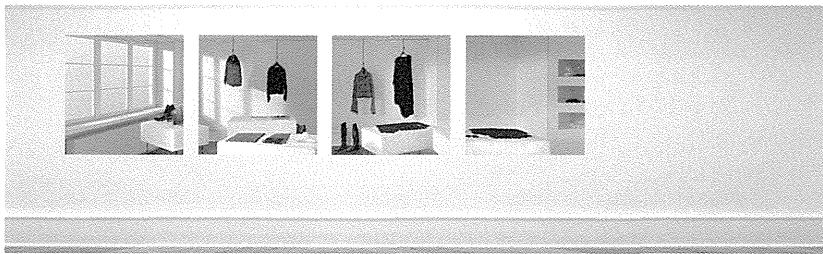
“Extending Symmetries” consists of two rooms with a sequence of photographs which have a mirroring effect as if the shop space is extending into the wall, and with display tables & hanger hooks newly designed to complete the symmetry. Since the mirroring effect works optically only from one point of view, for each room different relationships to the mirroring surface were used. For the first room (Room A) the point is taken from the street so that when people look into the display window the effect works. Whereas for the second room (Room B), the main room, the point is taken in the middle of the opposite wall.



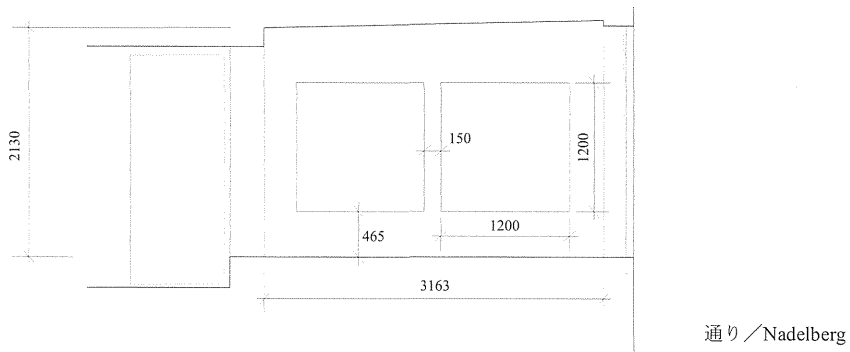
配置図／Plan 1:100



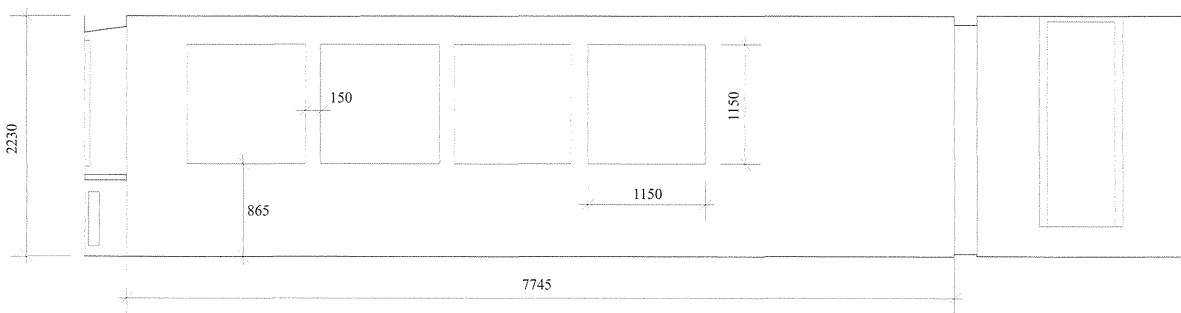
Room A 画像の配置-2連構成/Image composition - Diptych



Room B 画像の配置-4連構成/Image composition - Tetraptych



Room A



Room B

内部立面/Elavation

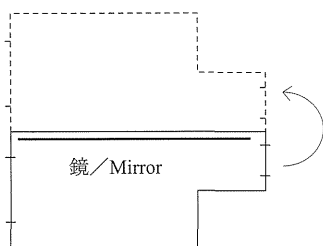
コンセプト、、、

拡張性(Extending)と対称性(Symmetry)のコンセプトは、私が普段からよく通っているこのお気に入りのショップが広くなればいいのに、という願望から生まれた。ここでは実際にショップを増築する代わりに、店舗空間において必須の「鏡」が持つこれら二つの性質に着想を得て、写真によりこれらの効果を模倣することで視覚的広がりを与えようとしている。空間の形態上、既存のショップスペースを撮影して鏡像をつくるのが難しかったため、これらの写真は、実は反転した状態のショップ（鏡像）を10分の1の模型にしてそれを撮影したものである。また、その模型上でディスプレイのための什器を新たにデザインした。模型を作る際には誰もが使うとてもシンプルな方法で作られたこれらの家具は、その後拡大されて1分の1の現実世界（ショップ内）でも使用されることで、対称性(Symmetry)を完成させると共に、拡張していく(Extending)というコンセプトを双方向なものにしている。

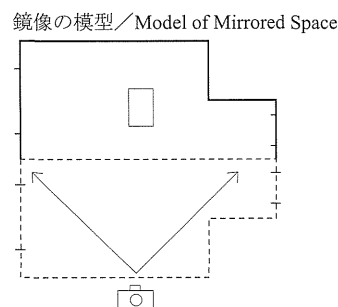
The concept of extending symmetry....

The concept of this installation came from a wish to extend my favorite boutique in Basel. To crystallize this idea, the mirror, an essential element in shop space, inspired me to use photographs which “pretend” to be mirrors. In order to create the mirror-effect, instead of modifying a photograph of the existing space, I built up a 1:10 scale-model of the shop that is perfectly mirrored and furnished with display elements that are derived from very common model-making techniques. This abstract display furniture was then brought back from the model into the actual scale to strengthen the concept of “extending” by being two directional.

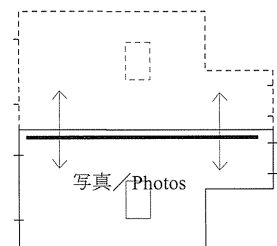
1.



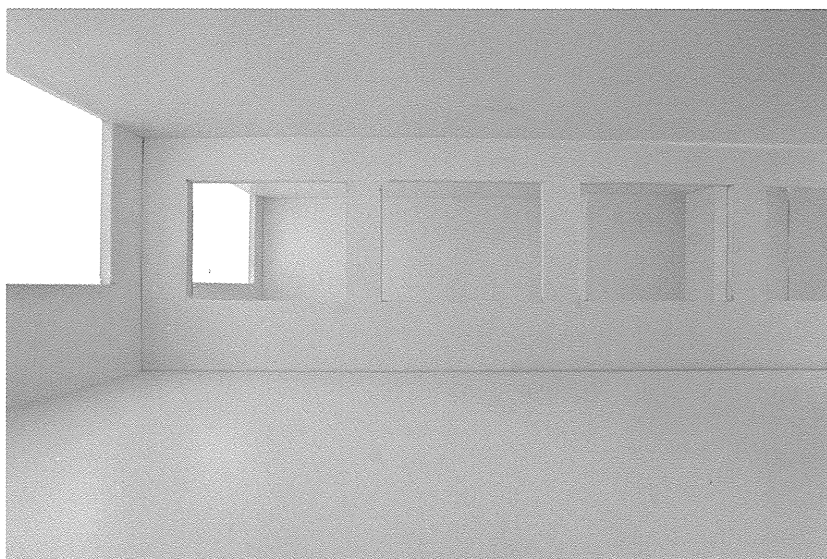
2.



3.

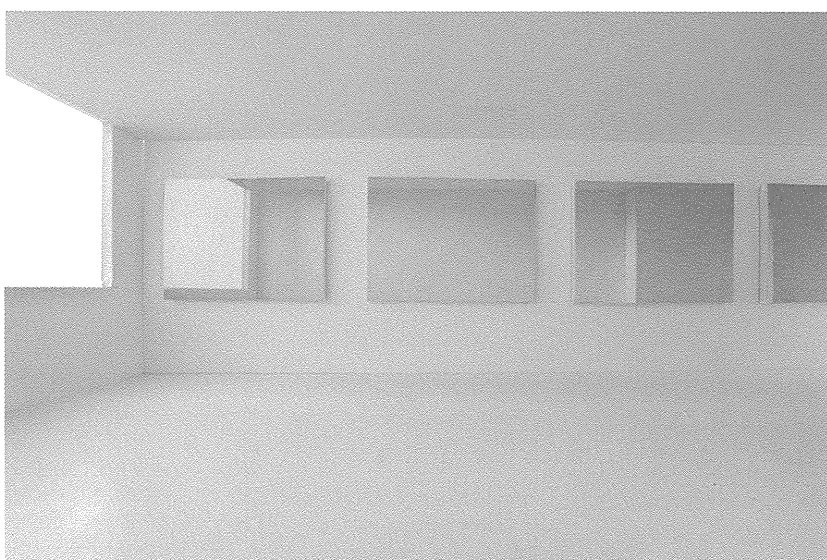


ダイアグラム/Diagram



試作模型写真 1 / Study Model Photo 1

壁に窓があり鏡像の模型がその後ろに見える状態 (ダイアグラム 1)
Looking at the mirrored-room model behind the openings on the wall (Diagram 1)



試作模型写真 2 / Study Model Photo 2

上の状態を撮影し切り抜き壁に掛けてある状態 (ダイアグラム 2)
The photographs of the openings above hung on the wall (Diagram 2)



視点 2 / Viewpoint 2



鏡に映る「鏡（写真）」を見る／
Looking at "Mirrors" (Photos) by the reflection of a real mirror



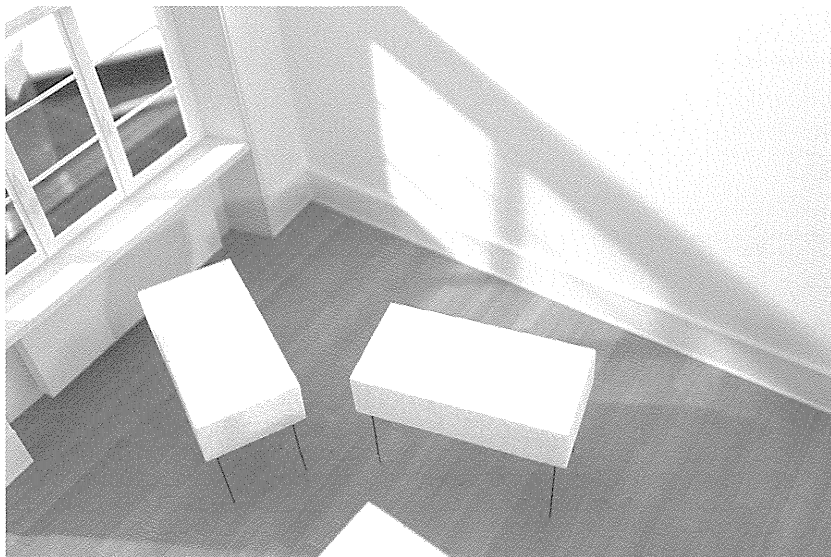


「鏡の国」との共通点、、、

ある時、不思議の国のアリスの続編「鏡の国のアリス」のことを思い出した。そこでアリスは鏡を通り抜け、その反対側にある鏡の世界を旅している。それ以来、写真の鏡によって映し出された空間を「鏡の世界」と呼ぶことにした。この世界ではディスプレイテーブルが唯一架空の存在である。これらの、模型作成上の制約から生まれたテーブルの白くてヴォリュームのある天板と黒くて細い足は、「ひつじ」を連想させた。鏡の国のアリスの中にもひつじは存在していて…突然すべてが繋がった。このインスタレーションでは、架空の世界(模型の世界)にしか存在しないはずのひつじ(テーブル)が現実の世界に飛び出して来ているのである。

The association with the looking-glass world...

At some point I remembered the second book of Alice in Wonderland where Alice goes through a looking-glass into the other-side world. I renamed my extended space which is the reflected space of the boutique “the looking-glass” world. In this world display tables are the only “creatures”. They have white volumetric bodies and black thin legs. And those characteristics, which come purely from simple model making techniques, made me associate them with “sheep”. Sheep also exist in the story of Alice in Wonderland, too... and suddenly everything became connected.



1/10 模型制作の様子 / Making of Model 1:10

その後の話、、、

このシンメトリーはしかしいつでも不完全である。例えば一人の女の子がカーディガンを買ってそこにプルオーバーが置かれた時、子供がひつじ(ディスプレイテーブル)にぶつかってその位置が微妙に動いた時、「鏡」の世界と現実世界とのシンメトリーはくずれ、時とともに二つの世界はそれぞれの道を歩み始める。これが写真でできた「鏡」の特徴であり、実際の鏡では起こり得ない現象である。そして私は、このスペースを訪れた人たちがこれらのちいさな違いを見つけて、いろいろなストーリーを想像してくれることを願っている。

A story afterwards...

This symmetry is always imperfect. As soon as a girl buys a cardigan and it is replaced by a pullover, or when a child pushes one of sheep and it changes its position slightly, the symmetry is broken, and these two real and looking-glass worlds will start going in their own directions. This is a characteristic of this installation which would not occur using mirrors! And hopefully everybody will create his or her own story by looking into my “looking-glass” world.



プロジェクトデータ / Project information

タイトル / Title: Extending Symmetries / The looking-glass sheep asks, «What is it you want to buy?»

期間 / Completion: November 2009 , (Exhibition 21st of November, 2009 - 31st of January, 2010)

所在地 / Location: HANDMADE, Nadelberg 47, 4051 Basel, Switzerland

チーム / Team: Fumiko Takahama, Eik Frenzel (photo), Dominique Berrel (graphic), Honorè Berrel (steel work)

Unless otherwise mentioned, all the photographs © Fumiko Takahama Photo: Eik Frenzel

写真家イワン・バーンとの対談

2010年4月27日／上海・パーゼル

高濱　今回は万博の撮影のため上海滞在中で忙しい中、この対談のために時間を割いてくれてどうもありがとう。

バーン　どういたしまして。はじめましょう。

高濱　今回幸運にもこのtraverse11に執筆する機会を得て、去年ヘルツォーク&ド・ムーロン事務所での仕事とは別に個人でやらせてもらったインスタレーション、「拡張するシンメトリー」を紹介また再考することで、私が最近考えていることを表現するのがいいのではないかと考えました。昨年の年末に訪れてくれましたよね。そこで、この展示でとても重要な役割を果たしている写真について、ぜひあなたの意見を聞いてみたいと思ったわけです。まずは感想を聞かせてもらえますか。また出来れば、写真と建築という文脈の中で、このプロジェクトの位置付けをしてみてくださいののですが。実はこのプロジェクトを説明をする時に、いつも端的に説明できないもどかしさを感じていて、もしかするとそれはこのプロジェクトにおける建築と写真の関係が特殊だからではないかと思っているのです。出版にあたって、これが建築なのか、インテリアなのか、アートなのかの分類・位置付けしづらなのが難点でした。職業柄、出版社との仕事が多いと思うので、その辺りも何か話が聞ければ…

バーン　まず出版に関することで言えば、建築写真は9割の人にとってある建物を体験する唯一の方法だと言えます。建物は動かないから。

高濱　そうですね。それが最も一般的な建築と写真の関係だと思います。建築家はなかなか写真を避けて通れない。でないと住人か訪問者しかその建築を経験できないということになります。そしてこの展示では、写真が建築の一部として使われており、まさに今あなたが言った通常の写真と建築の関係にないために記述するのが難しいのだと思っています。このインスタレーションの壁に掛かっている写真と、それを記録した写真とはまったく意味が違う。

バーン　私もそう思います。この展示は、そこにいることがとても重要だと思う。鏡に見えていたものが実は写真だと分かったり、写真に見えていたものがある地点に立つと突然びったり合ったりまた鏡になったり。その過程全体が人々に興奮を与えるんです。だからやはり体験することがとても重要で…なのでこの展示自体の撮影はある意味やりにくかったんじゃないかな。

高濱　確かに。実際に展示風景の写真を見せても、展示内容をわかってもらえないことがよくあります。写真が完全に鏡に見えてしまっていて、「素敵だけど、何をやったの？」って。その度に実はこのショップはすごく小さくて、ある種の「鏡」によって広く見えているんだけど、その鏡に見えてるのは実は写真で…という風に順を追って説明せざるを得ません。

バーン　そうですね。それは恐らく一種の歩行体験みたいに、ビデオを使ってしか記録できないようなことですね。歩いている時画像は歪んで見えているのだけど、ある点に来るとびったり合うというように。多分鏡のせいだと思いますが、3週間前にイスタンブールで似たような体験をしました。以前レム・コールハースのパートナーだったREXが手がけたVakkoというイスタンブールのアパレル会社の本社屋の撮影（写真1）だったのですが、建物全体がほぼ鏡できているんです。そしてこれは撮影できないかと。

高濱　本当に？もっと聞かせて下さい。

バーン　この建築を撮影する際、鏡の反射を使って

おもしろい構図を作るのは簡単なんです。問題は、すべてが上下逆さまだったり、変な角度で歪んで見えたりするので見る人が実際何を見ているのか理解できないところなんです。写真では理解してもらえない点があなただけのインスタレーションに似てますよね。結局この撮影では動画も撮るはめになりました。すると文字通り全てが息を吹き返し、鏡による効果が理解出来るようになったのです。例えば、歩行者は中で万華鏡のように反転していたり、上下逆さまだったりするのですが、動きが加わることで何を見ているのか理解する手助けになります。さもないと、写真はまるでPhotoshop加工された画像みたいに見える、この写真家は一体何をしたんだということになる。



写真1 / Photo1 Vakko本社/Vakko Headquarters, REX ©Iwan Baan

高濱　なるほど、内部が鏡で覆われているんですね。

バーン　はい。インテリアはすべて鏡です。建物のまったく新しい見方と記述の仕方をする必要とする撮影しがいのあるプロジェクトでした。すべてが反射して上下逆さまになってしまい、難しかったです。

高濱　面白いですね。ということはつまり、私は気付かないうちに、はなから写真に撮るのが難しい要素を主題に選んでいたということになる。

バーン　そう。そもそも鏡を写真に映すのは難しいし、自分が何を見ているのかを理解するのも難しい。更にこのインスタレーションの場合は空間を広く見せるためその鏡を模しているようなものだから…

高濱　いや、まさにそれが意図です。

バーン　同時に、あなたの写真は鏡と正反対の体験でもあって…なぜなら鏡ほどの角度から見るかによって像を変化させるけれど、あなたの写真は特定の地点でのみすべてがびったり合う。

高濱　確かに。でもその両面性はこのインスタレーションのクオリティの一つです。「広く見せる」という単純なコンセプトにある種の複雑性を持たせようとしています。まずは、写真を使って「鏡」を表現すること。そしてもう一つは、（実は技術的制約から来ているんですが）その写真を「模型写真」でやることです。建築をやっている人には馴染み深い模型写真。確か、あなたは模型写真を撮るのは好きじゃないんですよね…

バーン　好きじゃなくないです。ただ今のところ自分の中心主題ではないということです。例えば僕が以前、模型の中を歩いているかのような空間体験ができる技術を開発したのを覚えていますか。そういった、どうやって表現するかについてはいろいろと考えています。

高濱　模型写真があなたの焦点にならないのは、模型にはアクティビティがないからなのではないかと思

ったのですが、とはいえ我々は普段、模型に人のフィギュアなどを置いて何かしらのアクティビティを装うのですが、それでは十分ではないのでしょうか。

バーン 私は、模型写真と私のその他の写真とでは、別のアプローチが必要だと思っています。模型写真は純粋に建築を表現するだけのものであって、ある意味とても技術的で、それにはあまり興味が無い。僕にとって模型の中を歩くための技術を開発するのはとても大変なことでしたが、それも写真というより技術的な側面での話です。すべてが整理してないといけなかったり、一定の光が必要だったり。それに対し、他の写真はもっとある特別な瞬間や感覚、「すべてがしっくりきてうまくいっている」その瞬間を捉えるためのものです。

高濱 つまり模型写真はあなたにとって、人がその中を歩いているような気分にさせるべきものということ？それは建築物でも同じではないんですか？

バーン いや、模型写真は私にとってただの記録で、とても技術的なことです。光や角度を好きなように調整して写真を撮らばうまくいく。それに比べ建築写真は、瞬間を発見することです。時にその瞬間は数秒しか続かない。しかしそれを捉えた時にはある種の興奮があります。しかもその瞬間は常に待ち構えているからといってコントロールできるものではないんです。

高濱 なるほど、それは面白い比較ですね。私にとって模型写真は設計した空間を表現したり確かめるだけのものではなくて、予測してなかった空間を発見する過程でもあるんです。技術的なパラメーターを調整できないせいもあるかもしれませんが。

バーン 実際の建築や空間を扱うのはとても素晴らしい感覚です。私の場合、基本的に撮影現場に着くとすぐに、その空間をどう撮りたいか、どの視点がいいか、またどう表現したいかが決まります。その後は、人々の触れ合い・光の変化やその他ありとあらゆる種類の不確定要素が相互に作用しあっていたのが突如として一つの出来事になるその瞬間を探しながら、その空間での新しくてささやかな体験たちをフレームに収めていくだけです。良い例が、伊東豊雄による銀座のミキモトです(写真2)。その日、私は一日中撮影のために建物周辺を歩き回っていました。すると突然、ほんの数秒そこに女性が座ったのです。私は通りの反対側にいたので、操作できるはずもなく、しかしまたそこに座ったその女性のおかげでいい写真になった。そして最終的にこの写真は、このプロジェクトの象徴的なイメージになったんです。これが私の言う「ぴったり来る」瞬間で、コントロール出来ないけど、リアルでわくわくするものです。模型写真のように、完成され閉じた環境での撮影ではこうはいきません。でも実は、このインスタレーションを経験する時には同じような興奮が得られるのではないのでしょうか。はじめ意図がはっきりわからないままに写真を見ているのが、ある瞬間に「ぴったり来る」という。

高濱 建築を撮影するプロセスとこのインスタレーションの体験との間に類似点があるということでも面白いですね。このインスタレーションは一人一人にとって小さな物語のようなものなんです。お店に入る、歩き回る、商品を手取る、販売員と話をする、そうしている間もずっと写真は空間の一部として存在している。そしてある視点に立つと、突然写真は「鏡」になり、その中に続く拡張された空間、シンメトリーに気付く。でもそれではまだ完全な理解には至ってなくて…というのも写真がまだちょっと変なはずなんです。写真は単に現存のショップを写して反転したものではなくて、店内が鏡に映った状態(鏡像)を10分の1の模型にして写したもののなので。この両面性や複雑性、何より全体の物語はひとつの強いイメージでは説明できなくて、だから建築雑誌にそぐわないのかもしれない。

写真2 / Photo2
ミキモト、伊東豊雄
Mikimoto, Toyo Ito
©Iwan Baan



バーン まさにそうですね。実際に空間を体験する際にだけ得られるそういった類いの興奮を、写真を通して得られるものと比較対照しながら語るの面白いかもかもしれませんね。あなたのインスタレーションはかなり体験型のもので、すべてがしっくりとくる瞬間が来るまでの過程に意味がある。だから撮影するのは極めて難しい。角度がぴったり合いシンメトリーが現れる、その発見の瞬間を写真しても、そこで得られるはずの興奮はなくなってしまいます。それに完璧だと鏡を見ているのか、模型写真を見ているのか、常に情報を付け加えないといけなくなってしまいます。旅行者の写真と同じことですよ。興奮した瞬間を「記憶」するために写真を撮るんだけど、写真自体は全然その興奮が伝わるものになっていない。

高濱 それじゃ、この展示を撮影するのはあなたにとっても挑戦ということですね。

バーン そうですね…

高濱 残念。撮影の機会をきちんとつくっておくべきでした。あなたがどう撮ったのかすごく興味があります。ここに連れてきた友達や建築家はあなたが言うとおりに、みんな鏡の効果に夢中になって、「反射」や「対称」が成り立っている写真を撮ろうとするんです。でも後々その写真は完璧過ぎてもおもしろくないと思う。この効果を確かめようとしてみんな写真を撮りたがるんですけど、そうやって撮った写真にはこのプロジェクトのもつ強度は感じられないんです。展示風景の記録写真にも言えることなんです。

バーン 面白い瞬間というのは、すべてが完璧に配置されていない状態なんだと思います。例えば、みんなが興奮してその空間の写真を撮っているんだけど、まだ壁の写真は歪んで鏡像になりきれしていない瞬間とか。すべてがぴったり配置されてしまうと、もう鏡か、窓のある大きな一室が見分けがつかなくなってしまふ。この点を考慮しないと、肝心の両面性が伝わらない。そしてその両面性がこのプロジェクトの強みなんですから。

イワン・バーン
建築写真家。オランダ出身。ヘルツォーク&ド・ムロンによる北京オリンピックスタジアム、OMAによる中国中央電視台(CCTV)など、世界を牽引する建築家に指名され、多岐にわたって世界の現代建築を撮り続けており、その写真は世界中で広く出版されている。

Conversation with Iwan Baan Shanghai- Basel 28.04.2010

Fumiko Takahama (FT): First of all, thank you for finding some time for this dialogue, I know you're busy in Shanghai for the opening of Expo 2010...

Iwan Baan (IB): My pleasure. So, tell me...

FT: I was invited to write an essay on some of my latest work and wanted to focus on *Extending Symmetries*, a personal project I recently completed, alongside the work I do with Herzog & de Meuron. You visited it at the end of last year, right? I wanted to talk with you about it because photography takes a very important role in the installation and in how I documented the exhibition. So I would like to ask your opinion about the installation and, if possible, I would like you to try and position *Extending Symmetries* in the context of photography and architecture. Whenever I was asked to explain what this installation was about, I had some difficulties. And I thought it might be because, in the work, the relationship between architecture and photography is not so usual or common. For publications it was hard to label or categorize it as architecture or interior design, or a piece of art. You work a lot with publishers, so maybe you have an idea...

IB: For example, if you talk about publications, then architecture photography is the only way 90% of people gets to experience a building...because buildings can't travel!

FT: Yes, that is probably the most common relationship between architecture and photography. As an architect you can hardly avoid photography, otherwise only the people who use a building and visitors could experience the architecture. And I think the reason why this installation is difficult to describe through photography is precisely because its use of photography in relation to architecture is very unusual compared with this. The photographs hung on the wall in this installation have completely different meaning to the documentary photographs of the installation.

IB: Yeah, I think so. Your installation is very much about the physical experience of being there. From the show window the photos look as windows or mirrors. Then when you come into the space, the photos on the wall appear distorted, but then you arrive at certain standing point in the next room and then suddenly everything comes together again. This whole process gives people a kind of excitement. That's why it is about experience, which is very important... So I guess it was, in a way, strange to photograph this exhibition...

FT: I agree. For example, some people found it hard to understand the installation by looking at the documentary photographs because the photos on the wall look like mirrors. The mirroring effect is too perfect and they say 'it is cute but what did you do?' So every time I had to explain step by step, actually it's a tiny shop space and some of the space you see is not real but a kind of 'mirror'. And, in fact, the mirror is actually not a mirror but a photograph pretending to be a mirror...

IB: Yes, it is almost something you have to document with video, a sort of walking through. As you walk through, you would see the images distorted, but at a certain point – while walking – everything would fall into place. I had similar experience a few weeks ago with mirrors. I was in Istanbul shooting the new headquarters for a fashion company by REX (a former partner of Rem Koolhaas). The whole thing is basically only with mirrors and I realized it was almost impossible to photograph (Photo1)...

FT: Really? Tell me more...

IB: In photography it's not so difficult to make a nice composition with mirrors. But the problem is that since everything is upside down and in strange angles, the viewers don't have any clue what they are looking at. This difficulty of making people understand through photograph is similar to your installation, isn't it? I actually ended up filming the project. Then, literally, everything came back to life, and you started to understand the effect coming from the mirrors. People walking through the space are mirrored, upside down, in a sort of kaleidoscopic thing. So the movement helps you understand what you are looking at, otherwise it looks like a Photoshop image and you don't understand what the photographer has done.

FT: I see. So the interior is clad with mirror?

IB: Yes, the whole interior is done only with mirrors. It is an interesting project to photograph because it required a completely new way of looking at the building and also describing the building. Everything is mirrored, everything is upside down.

FT: Interesting. So I managed to pick a subject for my installation that is in general difficult to photograph...

IB: Yes, in general it is hard to capture mirrors in a photograph and to understand what you are looking at. In a way, your installation mimics a mirror in order to extend the space...

FT: Yes, that is my intention.

IB: ...But at the same time, the installation is more like the opposite experience of a mirror, because only at a certain point does everything fall into a place. In an actual mirror, the reflected image is always changing depending on the angle you approach it from.

FT: Right, but this is a quality of the installation: ambivalence. I wanted to bring a certain complexity to the concept. So 'mirroring' through photography was one way of doing this. The other was through something architects are familiar with: scale-model photography. (Though it had to be because of a technical issue.) I know you don't like to take model photos...

IB: Don't say I don't like it! Of course I do, but at the moment it is not really my focus. But, for example, I once developed a technique where you can basically walk through models. It is something that I have been thinking about a lot, how to represent these kinds of things...

FT: I wondered if one reason you don't focus on this kind of work is because there is no activity in models. We always put model figures in to simulate some kind of activity, but maybe it's not enough for you?

IB: I think it needs a different approach to my other photography. Model photography is only about representing architecture. It is very technical and, for me, that's less interesting. It was a real challenge to develop the technique where you can really walk through the model, but this is less about photography and more about technical things. You need everything perfect aligned, with the perfect light, whereas my other photography is much more about a specific moment and a feeling and a sort of 'everything comes together' moment.

FT: So for you model pictures are to let people feel as if they are walking through the architecture? But isn't that the same with the photographs of built architecture?

IB: No, for me model pictures are documentation. It's all about having the control of technical conditions and then you take a picture you like, and everything is ok. My architectural photography is about finding a moment, which sometimes only last for a few seconds. There is a sort of excitement you get when everything becomes right to take the picture. It's not something I can control even though I am always looking for it.

FT: That is interesting. Because, for me, photographing models is not only about representing or verifying the space you designed but also a process of finding unexpected spaces. Maybe it's because I don't have all the technical parameters under control!

IB: I think it is an astonishing feeling dealing with real buildings and space. Because once I'm there, I basically know in five minutes how I want to shoot it, or which would be the right angles, or how I will want to represent it. Afterwards it comes down to framing these new, little, sorts of experiences in the space, finding moments when suddenly there is people interaction, light interaction, all sort of uncertainties which fall into place. A good example is the images of Mikomoto in Tokyo, by Toyo Ito (Photo2). I had been walking around the building for a day trying to capture it, then suddenly – and just for a second – this woman sat there. I was at the other side of the street, so it was completely out of my control, but she was sitting there, just sitting there, and it made a nice picture that became in the end an icon image of the project. This is the moment I call 'things falling into place'. I cannot control it, but it's real and it's exciting. It's not so easy to achieve this with model photography because it's a sort of closed environment. And, in fact, maybe it's the same sort of excitement you can have while experiencing your installation: when you first walk into the space, you just see a series of pictures on the wall and you don't really understand it, but once you come to the right angle then "everything falls into place".

FT: It is interesting that you see similarities between the process of photographing architecture and the experience of the installation. My installation is like a small story for each person. They enter, walk around, check some merchandise, and chat with the owner, all the time

surrounded by the photographs that are a part of space. But when they stand at certain points, the photographs suddenly become a 'mirror' and they find the extended space, the symmetries. But it's not complete because there is something strange with about the pictures: they are not simply photographs of the existing shop, but photographs of a 1:10 scale-model of the shop. So there is this ambiguity or complexity again, and the whole story cannot be explained in a single strong image. I think this complexity makes it hard for architecture magazines, because the installation – like real life – cannot be reduced to one-or-two pictures.

IB: Exactly. It could be interesting to talk about the different sort of excitement you get experiencing space directly, as opposed to through a picture. I think with your installation, the excitement is very much about being there and walking around and finding that moment when things fall into place. It's extremely difficult to take pictures of this because if you take a picture describing that moment of discovery, with all the angles lined up and all the symmetry, then the excitement itself is gone. In the photo it is hard to tell what you are looking at. You always need additional information. It's the same problem with tourist photography. You take a picture to 'remember' an exciting moment, but the picture itself is not exciting.

FT: So, it would be a challenge for you to photograph this installation...

IB: Yes, I think so....

FT: Oh, no... I wish we had a chance to try it... I am curious how you would have photographed it. Often when I took some friends and architects to the installation, they were really into the mirroring effect, so they wanted to – like you say – take perfect pictures in which the 'reflection' or 'symmetry' is working. But I am sure that afterwards, those photos looked too perfect. It was the excitement which drove people to take a picture to prove this effect, but in those photos you cannot really feel the strength of the project. It's basically the same with my documentation photos, too.

IB: The moments which would be interesting are when things are not yet perfectly in place. For example, when people are taking pictures of the space, getting excited, but while the images are still distorted and not yet perfect. When everything falls into place then it is difficult to say if it's a mirror or a big room with windows. Without this kind of consideration, the ambiguity is lost and that is the strength of the project.

Iwan Baan:

An architectural photographer from Holland. Commissioned by leading international architects, Baan has photographed a wide range of the world's most exciting contemporary buildings, including Herzog & de Meuron's Olympic Stadium and OMA's China Central Television (CCTV). And the photographs have featured in numerous publications.

"Mr. Baan sees buildings as backdrops for his photographs of people, he said during a recent visit to New York His work owes as much to Diane Arbus and Henri Cartier-Bresson as to Julius Shulman or Ezra Stoller, the pre-eminent architectural photographers of the late 20th century." (From New York Times)

まとめ

冒頭で述べた「見るちから」は、つまり私自身の興味やこだわりそのものであり、それによって無意識のうちに、このインスタレーションが極めて視覚効果に頼ったものになったことは間違いない。ふと以前、竹山先生に「君のつくる空間はとても静的だね。」と言われたことを思い出した。実際ここでは、設定されたたった二つの視点でしか期待する効果（拡張）は現れない。しかしこの極端過ぎる操作が、結果的にはその瞬間以外の体験にも意味を持たせ、物語のような連続性を生んでいる。それが個人的には気に入っている。今の事務所で働き始めてちょうど3年になるが、日頃働いていると、その時々締め切りに追われて、なかなか自分が一体何を考え、学んでいるのか振り返ることはまれである。幸運にもここに執筆する機会を与えて頂いた、伊勢先生、竹山先生に感謝の意を表したい。

Summary

In the end, my obsessiveness and interests can be summed up by the phrase “to have an eye”. In my work, this theme emerges again and again. For example, the role of photography within the project and the subject of optical illusions are a clear response deriving from this idea. While writing this, I recalled a comment by Professor Takeyama who said “the space you design is (often) very static.” This installation is an extreme case of static-ness since there are only two fixed viewpoints which offer the “correct” perception of the space I designed (extension). In fact, the static-ness is so extreme that the moments before and after discovering these two points also come to have their own meaning. As a result the experience has a continuity, something like a story. This is something I am happy about it.

Three years have passed since I started working with Herzog & de Meuron. In my daily work I am often rushed with various tasks and it is rare to find moments of calm when I can become aware of where my thoughts are and what I have learned recently. Therefore I would like to express my gratitude to Professor Ise and Professor Takeyama who have given me this great opportunity to bring these moments together.

高濱 史子

2007- ヘルツォーク&ド・ムーロン勤務
2007 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
2005-2006 HHF Architects、バーゼル
2004-2005 ETHZ チューリヒ工科大学 留学
2004 クリスマン・ケレツ建築事務所、チューリヒ
2003 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士入学
2003 京都大学工学部建築学科学士修了
1979 神戸生まれ

Fumiko Takahama

2007- Architect at Herzog and de Meuron, Basel
2007 Complete master thesis under teaching of Prof. Herzog and Prof. De Meuron from ETH Studio Basel
Graduation of Postgraduate School of Engineering, Department of Architecture, University of Tokyo
2005-2006 Internship at HHF Architects, Basel
2004-2005 Swiss Federal Institute of Technology Zurich, Department of Architecture, Guest student
2004 Internship at Christian Kerez, Zurich
2003 Entrance Postgraduate School of Engineering, Department of Architecture, University of Tokyo
2003 Graduation of Department of Architecture, Faculty of Engineering, Kyoto University
1979 Born in Kobe, Japan